発表題目：ノイズキャンセリングイヤホンの着用が生み出すつながりとへだたり
―日本の発達障害当事者女性たちが集うグループを事例として

所属：筑波大学大学院　人文社会科学研究科歴史・人類学専攻
氏名：東風 ゆば

1200 字程度で発表内容を記載してください。

本発表の目的は、発達障害当事者女性たちとノイズキャンセリングイヤホンイヤホン・ヘッドフォンとの関わりを契機として生じる、多種多様なへだたりやつながりを考察することである。発達障害、特に自閉スペクトラム症に関わる概念は、国際的な診断基準においても、また概念が日本で普及する際にも、「コミュニケーションの障害」であることが強調されてきた。しかし、これまで発表者が取り組んできた、関東地方の 20 代の当事者女性が集まるグループでの参与観察の場において頻繁に指摘されていたのは、コミュニケーションとは異なる困難さであった。具体的には、学校や職場など、刺激が多い環境に長時間とどまることが必要とされる状況と、その環境に長時間いることが難しい彼女たち自身の身体の間にあるへだたりとその対処が頻繁にグループの話題になっていた。身体と環境とのへだたりは、彼女たちにとって原因がはっきりしない疲労として認識されていた。そして、このような疲労こそが、自分たちが学校や職場などの環境に長時間とどまることを難しくしていると彼女たちは推測していた。つまり、問題は彼女たちのコミュニケーションの困難さではなく、コミュニケーションが行われる環境と彼女たちの間の関係性であった。

このような疲労を軽減するためグループで勧められているのが、ノイズキャンセリングイヤホンや環境音を軽減するために用いられる一般的なイヤホン・ヘッドフォンの着用である。機器を着用して、エアコンの音やおしゃべりなどの環境音を軽減することで、彼女たちは環境に起因する疲労感の軽減を試みていた。ただし、学校や就労の場で機器を着用することは、環境とのへだたりを軽減させる一方、周りの人々とのへだたりを生じさせる場合もある。他の学生がイヤホン等の機器を用いていない場で、ひとりだけ機器を着用することは、他の学生から注目されたり、一般的な学生とは異なる存在として見られたりすることにつながる。また、時に機器の機能そのものがへだたりを生み出すこともある。機器がコミュニケーションに必要な音も環境音として打ち消してしまい、それによって彼女たちは周りの人々の話し声が聞き取りにくくなるのである。

一方で、これらのへだたりの存在を共有しその対処を考えることが、当事者同士のグループでの継続的なやりとりを生み出し、新しいつながりをつくり続けていると捉えることもできる。彼女たちは SNS や対面で集まり、上述のようなへだたりに関するエピソードについて面白おかしく共有しあったり、使いやすかった機器の種類や、社会生活において機器を着用し外すタイミングなど、機器を着用した経験知を共有したりする。加えて興味深いことに、彼女たちのグループ名は、障害の当事者性によるつながりを示す言葉ではなく、ノイズキャンセリングイヤホンの名前を由来としている。本発表では、機器を貸し借りする参与観察の場面や SNS での会話などの事例をもとに、彼女たちによる環境音と身体との調整の探求に注目し、コミュニケーションの障害を強調する既存の発達障害概念を前提としない、ノイズキャンセリングイヤホンの着用者たちの世界とのつながりとへだたりのありようを論じる。